

研修報告書 No 32

研修施設：本山町立国保嶺北中央病院
いの町立国保長沢診療所

2012年10月に1ヶ月間高知県本山町にある嶺北中央病院で地域医療研修を行った。研修ではおもに指導医について病棟患者を受け持つとともに専門外来やリハビリの見学、各家庭への訪問診療、無医村地域の診療所での診察などを学んだ。

普段勤務している大学病院との違いとして一番大きく感じられたのは、科の細分化がないという点だ。嶺北中央病院では内科、外科、整形外科は常勤だが、婦人科、皮膚科、脳神経外科、泌尿器科といった専門性のある科は医師が週に一回高知大学病院より派遣されてきている。内科は一般のクリニックに近く、内科疾患のすべてを診るという状況であった。また、検査機械としてはCT、MRI、エコーなどがあった。もちろん放射線技師はいるが、読影してくれる放射線科医師はいない。撮影した画像を自分で読影しなければならない。そのため必然的に幅広い知識が必要となりあらためて学ぶことも多かった。また、今まで見学だけが多かった手技も実際に行うことができとても勉強になった。

診療所研修では日本で一番人口の少ない村である大川村診療所に行った。現在人口は400人を切っているが、村の大きさは山手線園内の約1.5倍もある。そのため、診療所まで車を使っても30分以上かかる地域に住んでいる人もおり、診療所では曜日を決めて巡回の車を出していた。その巡回車に乗せてもらったが、舗装されているとはいえすれ違いもできないような山道を進んで行った。ガードレールがない場所もある。冬になると雪が降り地面が凍結するという。そういった山の中に高齢者が独居もしくは老老介護状態で住んでいる場合も多く、患者数が少なくなっても診療所を続けなければならない現状が浮き彫りになっていた。

また、研修期間中に職域運動会というものがあり、病院の一員として参加した。役所や学校など地域の団体と交流を深める目的で一年に一度小学校のグラウンドを使用しなごやかな運動会が開かれていた。とても和気藹藹とした会であり、他職種の方々とも知り合いが多く地域に根ざした病院であることがうかがい知れた。

さて、今回の研修を通して高知県の医療問題に対して何かできることはないだろうか考えてみた。研修を行った地域で行われていた診療は利益につながるものではなく、国や各自治体の補助があってこそ成り立つものであった。しかし医師不足が叫ばれている現在において僻地での診療に従事する医師は少ない。自治医科大学出身の医師がいてこそ成り立っていた。そして助成金制度や地域枠の拡充など様々な試みがなされているが抜本的な解決は難しいであろう。では、現実的に今できることはないだろうか。自分自身が高知県に研修に来ることが決まったとき、インターネットを使って現地の情報を調べてみた。もちろん役所関連のホームページを見つけることはできたが、実際に現地の人の言葉で書かれているようなこちらが知りたい情報を発信しているものは少なかった。これでは高知県にゆかりがない人間にとっては何も分からないとしか言いようがない。地域の医療問題はどの

地方でも言われていることである。そのなかでも特に高知県にある現実を多くの人に知ってもらうには情報をもっと発信できていたらと思う。せつかく全世界がネットにつながっている時代である。情報を発信する人間自体が少ないとはいえ、利用しないことはないのではないか。

最後になりますが、今回の研修を通してお世話になったすべての方々に心より御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。